

観V&Cリスト

日出彦

2003. 4～5

このところ映画館に行ってません。その代わり Rental Video は結構見てます。でも、見た端から忘れてしまってます。週リズムで生活しているため、短期レンタルは無理なので、封切りから6ヶ月というのは御の字です。旧作発掘モノも多いですね。Xファイルの最終章が並んでますが、いつ観られることやら。そんな訳で、今回はVOL. 21の「徒然しねま日記」(Chicaちゃん)に刺激されました。ム、ム、羨ましい。沢山Cを観ている！ 小生の観たものと一つも重なっていないところが特徴です。このままじゃだめだギアと気合を入れて、とりあえず2本観てきました。でもV&cというところですよ。

この徒然しねま日記にエールを送りたいと思います。まず、アニメ付きの手書き文字は著者との距離を縮めていてすばらしい。評価の女の子もかわいいし……。小生はすっかり魅了されて読ませてもらいました。ハンニバルも見えてないのですが、レッド・ドラゴンも観たくなりました。このコーナー是非続けてください。

【シカゴ】(C) Virgin Cinema の premier 席で観ました。お客は数組で広々としてました。今年のアカデミー賞で助演女優賞、美術賞、衣装デザイン賞、編集賞及び音響賞と一寸的を外した感じの数々の受賞を果たしています。まさに Hollywood Musical でした。筋は単純です。もともとは1942年のウィリアム・ウェルマンの犯罪コメディによるもので、ジンジャー・ロジャースが主演した「ロキシー・ハート」が初演ということです。その後、何度かミュージカル化され、再演されましたが、1996年に「シカゴ」と新装したブロードウェイミュージカルが大当たりし、今回は、その映画化です。



舞台は1920年代のカポネ時代です。裏切った愛人を射殺した踊り子のロキシー・ハート(レニー・ゼルウィガー)と、クラブショーのスターだったが、夫と不倫した妹を殺害したヴェルマ・ケリー(キャサリン・ゼター・ジョーンズ)、それに彼女らを弁護する

敏腕だが悪徳の弁護士ビリー・フリン(リチャード・ギア)が主役です。彼女らは殺したことを後悔もしないで、ただ無罪になってショーのスターになることだけを夢見ている。それを看守のママ・モートン(クイーン・ラティファ)や弁護士が金のために手を貸すのですから、ミュージカルでなければひどい映画になってしまいますね。現実のできごとをすべてショー仕立てに表現する演出で、全編ミュージカルなのです。広い画面、テンポの早いダンスと身体に響く音楽で、画面から埃が立ってきそうです。まあ、たわいない悪女のサクセスストーリーですが、エンドクレジットになってもすぐ立たないで音楽を体感しましょう。劇場を出ても、All That Jazzのズン、ズンという響きが暫く残っている映画でした。☆☆☆☆☆☆



【デアデビル】（C）「昼は盲目の弁護士、夜は正義の使者：デアデビル」のコピーに釣られて観てしまいました。スーパーマン、バットマン、スパイダーマンと続く変身物ですね。（またまた出てくる）弁護士のマット・マードック（ベン・アフレック）は少年時代に産廃を浴びて盲目になってしまうのですが、「レーダーセンス」（と書いてますが、聴覚が鋭くなった人間ソナー？）の超能力を獲得し、デアデビルとなって悪に立ち向かうことになる。恋人役のエレクトラ（ジェニファー・ガーナー）がまたカンフーの達人なんですね。悪役も個性派ぞろいで、巨大企業のオーナー、ウイルソン・フィスクは、なんとグリーンマイルの「キリスト」役で涙ボロボロの、マイケル・クラーク・ダンカンが扮しています。映画の出来はまずまずですが、後味の悪い結末ですね（だから、教えない）。ハッピーエンドではないのだから。死んだと思った悪役がエンドクレジットの間で復讐を誓うんですが、続編狙いだよね。そこでハッピーなどんでん返しがあることを期待して…。

★★★

【WSABI】（V）ユミ役の広末涼子のケバイ服装はいただけなかった。広末のフランス語はそう聞こえたから、がんばったんだね。フランス刑事ユベール役のジャン・レノは日本ロケを楽しんでやっているみたい（役柄がすでにそうか）。ユミはユベールの隠し子だったんだ。最後のユベールとモモ（ユベールの昔馴染み）のやくざ相手の活劇は、建物内とはいえ、かつての日活みたいに無国籍ですね。それとも外人だから外交特権かな。藤原紀香主演の香港映画 SPY N よりはずっと出来はよかったけれどね。☆☆★

【海は見ていた】（V）インターネットでサーチすると酷評なんですね。山本周五郎の岡場所もの「なんの花か薫る」と「つゆのひねま」を故黒澤明が構想していたネタを熊井啓監督が映画化したものなんだそうです。CG のできが悪い、嵐の場面に迫力がないというのが不評の主な原因なんですが、それはその通りですが、瑣末に拘らないで、小生は結構楽しく観ましたよ。出てくるのは娼婦とお客だけなんですけど、



「海は見ていた」の遠野風子＝
左＝と清水美砂

お店も暗いイメージではなくて、肩を寄せ合い助け合っていくほのぼのとした人間味が出ていました。清水美砂の姐さん遊女の菊乃がよい出来で、深川の粹な女を演じていました。客に惚れっぽい遊女お新（遠

野風子）を中心に物語りは淡々と進みます。ミスキャストとの評もありますが、小生はそれほど違和感はなかったです。謎や緊張がないのと、殺しの場面に迫力がないのが黒澤ファンには許せないのだろうか。なお、遊女ものといってもピンクがかった描写は少ないです。ハイ！ ☆☆☆



【突入せよ！ あさま山荘事件】（V）危機管理というとテレビでおなじみの佐々淳行の原作の映画化です。当人も映画館の場面でお客として出ています。で、佐々役は役所広司です。いろいろなタレントが出演していますが、後藤田警察庁長官役は藤田まことです。連合赤軍の実話の映画化なので、派手なアクションはありません。当時、テレビに釘付けだった興奮は映画では出せていない。警視庁と長野県警の確執というか、主導権争いが描かれていて、マンネリな会議が続き、東京の警察庁からは勝手なことを言うてくるという人間ドラマとしての方がむしろ面白かった。☆☆☆

【ロード・トゥ・パーディション】（V）トム・ハンクス扮するアイルランド系ギャングの幹部マイケル・サリヴァンとポール・ニューマン扮するその親分ジョン・ルーニーの確執が芯になっている。マイケルはプロの殺し屋である。あるとき、それを息子のマイケル JR が目撃してしまったことから悲劇が広がる。ジョンの息子コナーは疑心に駆られ、マイケル JR を抹殺しようとして、マイケルの妻と下の息子を誤って殺してしまう。マイケルは復讐に駆られてルーニー父子を追い詰めていく。ルーニーの側でも、殺し屋マグワイヤを差し向ける。パーディションというのはマイケルの姉夫婦のいる土地の名前だ。マイケル JR を助けようと、その地に向かうのだが…。トム・ハンクスはあまりギャングには向かない。一所懸命に演じているが、何か違和感がある。フランク・ニティ役のスタンリー・トゥッチは一寸凄みが足りないが、味を出している。ポールニューマンもあまりギャングっぽくなかった。☆☆☆★

【スナイパー】（V）Liberty stands still というのが原題である。犯人（ウェズリー・スナイプス）は事前に劇場の俳優（リバティの愛人）を時限爆弾の作動している一室に監禁した。そして覚せい剤を買いに公園に入ってきた米国最大の武器製造業者、マクロード社の副社長であるリバティ・ウォーレス（リンダ・フィオレンティノ）をやはり時限装置の働いているホットドッグショップにつなぎとめた。こうして、目に見えぬ犯人とリバティの駆け引きが始まる。犯人は娘を少年に射殺され、武器製造業者に逆恨みしたのだ。動きが少なく、スナイパーのスコープを通したリバティの様子が写るだけ。原題は liberty つまり自由の意味があるようですが。☆☆★

【サウンド・オブ・サイレンス】（V）精神科医のネイサン・コンラッド（マイケル・ダグラス）はエリザベス（ブリタニー・マーフィー）という患者を同僚から任される。彼女は一言も喋らず医師を手こずらせていた。ところが、娘のジェシーが誘拐されてしまう。妻のアンジーは足を骨折してベッド生活である。誘拐犯からエリザベスから 6 桁の数字を聞き出せば、娘を帰すとってくる。さあ、どうするか？ 前半はまだるっこいが、後半からマイケルの一人舞台が始まるぞ。ただ犯人のコンラッドの現れ方が急なので、見ている方は犯人が憎いとも、可哀想とも思わない点が問題。でも終わりはハッピーエンド。ところで、これの HP で、謎の数字が出てきます。4870N536 (Dr. Conrad), 503736 (Koster), 321829374 (Elisabeth), 64273936 (What `s New), 87H3A74R38 (Theaters) などです。では小生からの問題です。6059G359 と 12063Y09 は何のことでしょうか？ ☆☆☆★



【ファイナル・ファンタジー】（V）ゲーム FF のアニメ化だが、人物の描写は精緻（顔のシミや産毛まである）なのに、みな無表情（人形的）なのが気に掛かる。ストーリーは最初よく分からなかったが、二回見て分かってきた。宮部みゆきが試写会に行った映画というので観てみたまで。☆☆



—以上—

